

# SRID NEWSLETTER

No. 350 January 2005 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www1.odn.ne.jp/~cdv20180>

## 1月号

草の根ラ・プラタ流域再開発研究会設立構想（骨子）

オイスカ・インターナショナル ウルグアイ総局 国際理事 三上 隆仁  
経験と専門性を生かした楽しい仕事の紹介

IDeA(国際開発アソシエイツ) 鳥山 正光

## お知らせ

1. 新年会 1月17日(月) 如水会館にて 午後6時から

## 草の根ラ・プラタ流域再開発研究会設立構想（骨子）

オイスカ・インターナショナル ウルグアイ総局 国際理事 三上 隆仁

### I. 趣旨・目的

アルゼンチン、ウルグアイ並びにパラグアイにわたるラ・プラタ流域草原は永年にわたる過度の放牧と化学肥料・農薬の過剰な投与並びに土地の酷使により、地力の低下と環境の劣化のみならず、人間、動物、植物の健康に悪影響を及している。この現状を改善するためアルゼンチン・山形県人会、ウルグアイ・日本からの適性技術導入農牧演習場、パラグアイ・オイスカインターナショナル・パラグアイ総局からなるパイオニア・グループによる草の根ラ・プラタ流域再開発研究会を組織化する。本研究会は将来ラ・プラタ流域において、各国のNGO、さらに地方政府をも対象とする草の根協力の推進母体となる草の根ラ・プラタ流域再開発協力連合会設立の基盤を造成せんとするものである。さらに南南協力として、ティグリス・ユーフラテス流域並びにナイル流域との協力の可能性を検討する。

### II. 活動分野

当面の活動分野は、次の通りとする。

1. 早成樹種による植林と木材工業の振興
2. 植林思想普及運動（子供の森プロジェクト）
3. 有用微生物群利用技術による土壌・環境の改良並びに人間・動物・植物の健康改善
4. 健康食品の開発（しいたけ、そば、高タンパク大豆等）
5. 食生活改善運動の普及
6. 自閉症児教育の普及
7. その他

### Ⅲ. 組織

本研究会の組織は、次の通りとする。

#### 1. 理事会

各団体から2名の代表をもって理事会を構成し、年1回開催する。

理事の任期は3年とする。

#### 2. 事務局

ウルグアイの日本からの適性技術導入農牧演習場が事務局を担当する。

#### 3. 専門家

各団体は関係分野の専門家を任命する。

### Ⅳ. 活動

1. 事務局は各国の活動計画案を作成し、理事会に提出する。
2. 理事会は活動計画案を審議し、活動計画を決定する。
3. 各国関係団体間の協力を促進するため、各専門家をJICA第3国専門家としてJICA・アルゼンチン事務所に登録する。
4. JICA第3国専門家並びに研修制度を活用し、専門家の派遣と研修員の受入れを行なう。
5. 事務局は毎年活動報告書を作成し、理事会に提出する。

### Ⅴ. 地域分担

1. ラ・プラタ流域は南緯 $20^{\circ}$ ～ $40^{\circ}$ にわたり、 $20^{\circ}$ ～ $30^{\circ}$ の亜熱帯地域と $30^{\circ}$ ～ $40^{\circ}$ の温帯地域から成っている。
2.  $20^{\circ}$ ～ $30^{\circ}$ の亜熱帯地域は、我が国の南西諸島並びに中華民国（台湾）地域に匹敵し、パラグアイ国アスンシオン市を基地とし、オイスカインターナショナル・パラグアイ総局が担当する。
3.  $30^{\circ}$ ～ $40^{\circ}$ の温帯地域は、次の2地域に分割する。
4.  $30^{\circ}$ ～ $35^{\circ}$ が温帯地域は、我が国の九州・中国並びに関西地域に匹敵し、ウルグアイ国ソリアノ県メルセデス市を基地とし、日本からの適性技術導入農牧演習場が担当する。

5. 35°～40°の温帯地域は、我が国の中部・関東並びに東北地域に匹敵し、アルゼンチン国ブエノス・アイレス州サン・カルロス・ボリバル市を基地とし、アルゼンチン山形県人会が担当する。

## VI. 活動資金源

本研究会の活動資金源は、次の通りとする。

1. JICA第3国協力システム（JICA事務所）
2. 草の根無償資金（各国大使館）
3. 草の根技術協力（JICA本部）
4. 米州開発銀行日本特別基金並びに多国籍投資基金
5. 日本のNGO支援基金（地球環境基金、日本万博基金、国際開発救援財団、地球市民財団等）
6. 寄付金

## VII. スケジュール

2005年4月1日に同研究会を発足し、活動を開始する。

会期は毎年4月1日から翌年3月31日とする。

## VIII. 研究会の構成

### 1. 理事

第1期の理事は、次の通りとする。

アルゼンチン：佐藤駒雄（山形県人会長）

伏見アルフレッド（山形県人会事務局長）

ウルグアイ：マヌエル・ウダンガリン

（日本からの適性技術導入農牧演習場会長）

三上隆仁（日本からの適性技術導入農牧演習場副会長）

パラグアイ：高倉道男

（オイスカ・インターナショナル・パラグアイ総局会長）

久岡 寛

（オイスカ・インターナショナル・パラグアイ総局理事）

### 2. 事務局長：フェルナンド・ストッツ

（日本からの適性技術導入農牧演習場事務局長）

### 3. 専門家

(1) 植林・木材加工：太田貞明

梶田 熙

(2) 植林思想普及：福原錦司

(3) 有用微生物群利用技術：マリオ・ウダンガリン

- 飯原フェリーペ
- (4) 健康食品開発 : 森山里美 (大豆栽培)  
飯原フェリーペ (しいたけ、そば栽培)  
フェリーペ・プエンテ (そば・大豆加工)
- (5) 食生活改善運動 : 梶田紘子  
エデイス・アルマネテイ
- (6) 自閉症児教育 : 三枝たか子

## IX. 活動計画

### 1. アルゼンチン :

ブエノス・アイレス州サン・カルロス・ボリバル地域

草の根再開発プロジェクト

- (1) 植林思想普及 (展示林・子供の森モデル校)
- (2) 有用微生物群利用技術普及 (活性化センター、普及センター)
- (3) その他

### 2. パラグアイ :

パラグアイ草の根再開発プロジェクト

- (1) 植林思想普及 (展示林・子供の森モデル校)
- (2) 有用微生物群利用技術普及 (活性化センター、普及センター)
- (3) その他

### 3. ウルグアイ :

A. 有用微生物群利用技術普及

B. 非遺伝子組替え高タンパク質大豆開発

C. ラ・プラタ流域研究研修センター設立プロジェクト

(1) 建物 : ソリアノ県庁所有の建物の一部を借用の予定 (メルセデス市中央広場)

(2) 研修内容 :

- ①早成樹種の植林と木材利用
- ②植林思想普及
- ③有用微生物群利用技術
- ④健康食品開発
- ⑤食生活改善
- ⑥自閉症児教育

D. その他

## X. 南南協力

前述のように、ラ・プラタ流域は南緯 20° ~30° の亜熱帯地域（アルゼンチン北部とパラグアイ）並びに 30° ~40° の温帯地域（アルゼンチン中部とウルグアイ）とから成っている。

### 1. ティグリス・ユーフラテス流域

本流域は北緯 30° ~40° の温帯地域に属しラ・プラタ流域の同緯度の温帯地域、すなわち、アルゼンチン中部とウルグアイに相当するため、相互の協力の可能性がある。

### 2. ナイル流域

本流域は北緯 20° ~30° の亜熱帯地域、すなわち、アルゼンチン北部とパラグアイに相当するため、相互の協力の可能性がある。

## 経験と専門性を生かした楽しい仕事の紹介

IDeA(国際開発アソシエイツ) 鳥山 正光

ODA 国内啓蒙という新しい仕事を始めました。興味のある方は情報と知恵をください。これまでに訪問国数が 109 カ国に達し、写した写真を重ねると高さ 3 m 余になりましたので、これを活用して国内 ODA 啓蒙プログラムを組むというものです。ODA 啓蒙テキスト作成を念頭に置きながらこれらの写真を整理していくうちに以下の 10 テーマに焦点が絞られてきました。

1. 発想の原点：時代の変化を読み取ることの重要性
2. 戦争は何も生まない：非生産的戦争とベトナム司令官の戦争人生
3. スエズ運河架橋計画：架橋計画と地域結合と中東和平
4. ナイル・ザイール・ニジェール河、大地溝帯：アフリカ大陸の全体把握
5. 平和と仏教と豪華列車計画：ハマースホルド元国連事務総長の平和戦略
6. 共に生きる・国際協力：援助全体の把握、現場写真の他にグラフや表が多くなる
7. 資金協力の現場：未完
8. 世界が動いた時代と植民地の傷跡：マジェラン後も続く植民地の深い傷跡
9. ODA インフラプロジェクト計画：計画と完成による計り知れない効果
10. 海の彼方の空遠く：海の向こうの未知の国への旅立ち

古い写真にデジカメを 20cm 位に接近させて写す。フラッシュを使用すると反射してしまうので使わない。その写真をパソコンに転送して明るさ、大きさ等を調整する。最後に、

パワーポイントに移動して編集する。説明会ではプロジェクターを使ってスクリーンに映しておこなう。1テーマは大体15～20コマ程度。自分で写した現場写真が主体だから的確に説明できる。更にグラフや資料写真等も加える。特に、古い月刊誌 National Geographics と世銀統計書が参考となる。

昨年、郷里の小学校の課外授業でこの方法で説明したところ大好評でした。IDeA で啓蒙活動ができればよいのですが、現在は、APIC（国際協力推進協会）と ECFA（海外コンサルタント企業協会）を窓口とて、日本各地で ODA 啓蒙活動を行う準備を進めています。SRID は間口が広く色々の分野からテーマを作れる人が多いので、写真・統計をベースにまとめたテーマが出来ましたら是非ご協力ください。

私の場合は道路公団、世銀、国際開発センター、国連 ESCAP、タイ国運輸省、国際開発アソシエイツで働いてきた関係で交通運輸分野が主体となっています。何故楽しいかと云うと、過去に蓄積したノウハウを活用するには最適なプログラムであること、これまで途上国ばかり回っていたがそろそろ負担になり、今度は日本国内の旅行がしたかったから。この国際協力啓蒙活動の共通テーマは「共に生きる」になるかと思います。

もう一つ具体化しようとしているアイデアプロジェクトがあります。IDeA の中に「高速自動車道路と地場産業活性化」というチームを作りました。現在14名が参加しており、ノウハウとしての計画立案資料も30篇に達しました。以前にこのニューズレターで紹介したことがあります。高速道路の沿道地域を開発するために、高速道路から2~3kmの立体交差迂回路を沿道村に引き込んで、そこに温泉、直売所、交流広場、製造加工販売ブロック等を配置するというものです。JBICが進めている「道の駅」の高速道路版に似ていますが、規模もコンセプトも全く異なります。

IDeAのスタッフ数は119名に達しましたが、興味をもたれた14名の中には、ノンフィクション作家、官庁退職者、建築設計家、電気技師、IT専門家等の多種多彩の人たちが参加して月1回の会合を楽しんでいます。関越高速赤城ゆっくり迂回路プロジェクトには、経済産業省の計画補助金1300万円がついて計画が進行中です。最近になって偶然、韓国の三星建設の会長も加わって、日本のバブル期を思わせるような開発発想が提案されました。ことによったら赤城プロジェクトよりも先に、韓国のソウルから南100km地点の太田付近に完成してしまうかもしれません。このアイデア計画を日本全国に広めたいと思っていますので、特に、東京から100km地点の高速道路沿線に知人がおりましたら是非ご紹介下さい。これは、私がODAで培った Feasibility Study の Internal Rate of Return 計画手法の国内版です。